

関としてのFLO「国際フェアトレードラベル機構」とその認証会社がますます必要とされてきています。フェアトレードの広がり、1団体、1企業のレベルをはるかにこえて、社会的広がりをもってきています。しかし、日本ではまだそのことがよく理解されていなく、さまざまなフェアトレードが通用している状況です。

最近、中国の餃子事件の犯人が捕まり、話題に上がっています。犯人は、「長年まじめに働いていたのに、妻も自分も正社員にしてもらえなかった」という不満が理由であると報道されています。餃子を購入していた日本の生協関係者もその工場を何度も訪問して、食の安全、安心の確保に努めていたに違いありません。しかし、労働者の状況まで調べることはできません。そこで、私はFLOのシステムの役割を再認識しました。フェアトレードの認証制度とそのシステムはこの



アジェンダ21とは 1992年リオデジャネイロで行なわれた環境と発展に関する国連会議、いわゆる地球サミットにおいて21世紀を控えて新しい経済プログラムであるアジェンダ21を提唱した。この背景には国家間並びに国内での貧富の格差の増大、飢饉、疫病、文盲、自然環境の破壊に世界中の人々が直面しているという危機感がある。環境と発展の問題を統合することにより世界中の人々の生活を改善し、より明るい将来を築いていく必要がある。そのためには持続的発展のための国際的パートナーシップが不可欠であるという認識からこのアジェンダ21は作成されている。そのご度目も見直されて今日にいたっています。

ような、労働者の働く状況や環境も第三者機関として調査しチェックできる機能をそなえています。フェアトレードの巡察官は、コーヒー生産者組合や紅茶園を訪問して、働く人たちと直接、個々に面談して調査するシステムを作っています。人間がやることは必ず間違いやミスが起きます。そこで、第三者が客観的にチェックするという機能はなくてはならなく、それによって改善されてゆくのです。

わかちあい連帯商品 バニラティーバック 25

タンザニア・バニラティーができるまで

松木寛子 青年海外協力隊 タンザニア派遣・村落開発普及員



松木、赤阪（右）

規作物バニラを青年海外協力隊3代でサポート

この度、わかちあいプロジェクトから販売が開始される「東アフリカ・タンザニアのバニラティー」は、3代に渡ってタンザニア・モロゴロ県に派遣されてきた青年海外協力隊の活動のもとで生まれた商品です。

私たちの活動地域であるモロゴロ県ムクユニ郡は、ウルグル山脈の山間にある農村で、住民のほとんどがメイズや稲作などの農業に従事しています。現金収入は、豊富に採れるマンゴーやパイナップルなどの果実売買によってもたらされます。郡の農業普及員として派遣された初代隊員の河合孝紀さんは、農家の現金収入向上を目指して、県オフィス・同僚の農業普及員と共に、2004年からバニラの普及に取り組み始めました。

バニラは、世界で2番目に値段の高いスパイスと言われている換金作物ですが、タンザニアではウガンダと隣接するカゲラ州で栽培が盛んです。栽培環境が適しており、大きな投資なしで試みることができる換金作物として、地元農業大学・JICA・京都大学の共同開発プロジェクト（SCSRD）のもとで、カゲラ州から苗を移植したのがモロゴロでのバニラ栽培の始まりでした。2006年からは、2代目隊員の赤阪京子さんが引き続き、栽培管理の指導にあたってきました。



バニラティーバック 25

農民グループTwanduseniと「一緒に始めよう！」

バニラは、植付から最初の開花まで2年半から3年もの時間を要します。そのため、すぐに目に見える成果が得られないことで、農民たちもやる気を失いがちです。赤阪さんは、2006年にムクユニ郡のバニラ栽培農家16名によって立ち上げられたTwanduseni Vanilla Growers Groupと共に、栽培学習のための農園巡回などを通じて、農民のやる気を維持させようと活動を行ってきました（「Twanduseni」とは、地元ウルグル語で「一緒に始めよう」の意味）。

2007年になって待ちに待った初めての開花が訪れました。バニラは、人工受粉させることが必要ですが、毎朝、一つ一つの花を受粉させていく手作業は、

コツをつかむまで辛抱強く教えることが大切です。2007年の開花・人工授粉の結果、翌2008年、7kgと少量でしたが初めての収穫を迎えるに至りました。しかし、ここで問題となるのが売り先です。

利益獲得に向けて

バニラのあの良い香りは、4ヶ月以上かかる加工プロセスによって生成されるバニリンという成分によります。つまり、加工しなければ、バニラとしての商品価値は得られないわけです。売買価格も、未加工バニラと加工済みバニラでは雲泥の差があります。

2008年は、農民たち自身で加工することができず、未加工のまま低価格で売るしかなく、得られた利益

も微々たるものでした。

バニラによって利益を得るには、農民たちの手で加工をして販売することが肝心です。そこで、3代目隊員の私が赴任していた2009年の収穫については、JICAタンザニア事務所からの支援のもとで、加工道具を準備し、農民グループと共に初めての加工作業に取り組みました。

2009年時点で栽培農家は約80名います。一人当たりの生産高はまちまちですが、2009年の総収穫高は90Kgに達しました（90Kgは未加工バニラ重量。加工済み重量では18Kgとなる）。2008年の収穫高7kgと比べると飛躍的な増加ですが、ビジネスとして展開するにはまだまだ小さなボリュームです。しかし、今まで利益なしでもあきらめずにバニラ栽培に取り組んできた農民たちに対して、どうにかして利益を還元しなければいけない・・・という思いから、細々とタンザニア国内のお土産店などに販売してきました。その結果、2009年は農民たちも納得する価格で支払いを行うことができました。

プロバの農民グループと協力して

生産量が小さな私たちは、未だ本格的に輸出を行う段階に至っていません。現在のところ、国内のお土産店などでの小売販売は好評を得ていますが、農民グループとして自立的かつ安定的にバニラビジネスを発展させる道がないかと、色々な可能性を試みようとして働きかけた結果、現地の「AFRI TEA AND COFFEE BLENDERS」という紅茶・コーヒー製造会社が、私たちのバニラを使ってバニラティーの商品化に協力してくれることになり、今回の商品が誕生しました。

ここでは、私たちモロゴロの小さな生産量を補ってもらうために、カゲラ州のバニラ農民グループKAVANIFAに協力を求め、協同でバニラを納入することになりました（KAVANIFA=Kamachumu Vanilla Farmers Associationは、モロゴロでのバニラ導入にも携わった京都大学大学院地球環境学堂の水野啓先生が支援しているバニラ農民グループ）。

今後も紅茶会社がバニラティーを製造していくかは、売れ行き次第というのが正直なところですが、将来にわたって農民たちの収入向上につながるかはまだ分かりません。しかし、2004年から6年以上にわたり、あきらめずにバニラ栽培に取り組んできた農民たちにとって、一つの大きな成果であり、また、一つの希望であることは確かです。

教育支援プロジェクト ミャンマー学生寮建設と自立のための農業プロジェクト

1999年から2007年まで、教育支援としてカンボジアで学校建設に取り組んできましたが、2008年からミャンマーで学生寮の建設と運営を支援しています。一昨年、土を取得し、2009年は建設に取り掛かるように地方政府に申請しています。今後の自立のためにコーヒーの苗木、320本、果物の木などを植えました。しかし、地方政府からの建設許可がえられないため、学生寮の建設に取り掛かれませんが、井戸の掘削やコーヒーの栽培など予定されていた事業はすすんでいます。



フェアトレードプロジェクト

この度、中国内モンゴル自治区にあるジャルート農民協会がフェアトレード大豆の生産者としてFLOに認証されました。39名の生産者で構成されています。フェアトレードのプレミアム（奨励金）で、生産者が自ら学習できる施設をつくる計画を立てています。

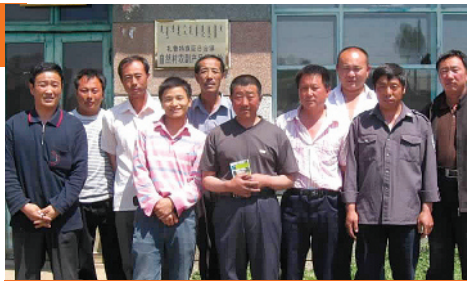
大豆から豆腐、納豆はじめ様々なフェアトレード商品を作ることが可能になります。すでに味噌、醤油会社に製造を委託し、**味噌**は、2010年秋、**醤油**は2011年秋に販売を開始する予定です。



豆腐

京都で修業を積み、現在、墨田区でお店、豆源郷を開いておられる横井さんの製造

最初は、国産の大豆でないので、うまく豆腐ができるか心配していましたが、実際作ってみて、その良さにびっくりされた様子。大豆のよさを生かすために、にがり量を少なく、豆の自然のあまさを生かして、絹ごし豆腐のおぼろに仕上げました。大変美味しくてプリンを食べているような感じです。これにバニラを加えればお菓子になってしまいそうです。



ジャルート農民協会のメンバーの写真

★金曜日に製造、配達、土、日、月の3日間が賞味期限 一回の仕込み5kgの大豆で50個製造 以上の条件では、個人に販売するのは難しいです。取り扱ってくださるお店を探しています。



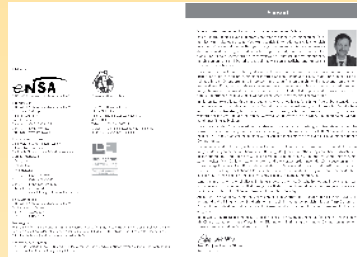
納豆

もっちりとして糸引きも強い良い納豆だと思います。大豆に力が有るように感じました。**製造して下さった(株)ユアードミーの北畠さんのコメントです。**
★フェアトレード有機納豆80g(40g×2)たれ、からし付き



旧東ドイツ地域への フェアトレード支援

1984年にドイツの教会から1万ドルの寄付を受けて、3冊の開発教育用の絵本を出版しました。その後何らかの形でそのお礼をしたいと考えていましたが、2009年9月ドイツの教会の推薦を受けて1万ドルをフェアトレードのネットワーク団体「EINE WELT Netzwerk Sachsen-Anhalt e.V.」に寄付しました。



1992年8月にスリランカから最初の紅茶を輸入にして、教会の全国総会で販売したのが、わかちあいプロジェクトの最初の活動です。それに至る経緯があります。

1983年秋、天城山荘を会場に、日本キリスト教協議会が主催する、日本と西ドイツの教会代表の協議会が開かれました。テーマは平和と開発でした。平和について発表するために私も参加しましたが、そのとき、発展途上国のことを知るための絵本を作りたいというアイデアをもっていました。そこでドイツの代表に、そのような絵本があるかとたずねましたところ、すでにドイツでは出版されていると教えられました。その後、その出版社に連絡して見本を取り寄せ、ぜひ翻訳して日本で紹介したいと思いました。そこでドイツに教会に資金援助を依頼して1万ドルの援助をいただき、皆さんに協力していただいでアジア・アフリカともだち文庫という名前で、3冊の絵本を、1986年1月、1986年12月、1988年12月に出版することができました。（アジア・アフリカともだち文庫という名前は、アジア協会アジア友の会の村上公彦さんの提案）、オリジナルを作りたいと思い努力しましたが、できないでいます。

いくつかの出版社に提案しましたが、どこも引き受けてくれませんでした。本を売るのは大変です。店に並べるまでのルートが素人にはなかなか作れません。また、絵本は1冊買えば十分です。そこで絵本を売って手元に残っていた資金を使って、スリランカから紅茶を輸入することにしました。

